

## は し が き

「放送」は、宿命的に「一方向性」である。「送りっ放し」と言われてきた。それにもかかわらず、放送界の先輩達は、ごく初期の段階から、放送の持つ、宿命的とも思われてきたこの欠点を補おうと努力してきた。視聴者参加番組の開発である。

まず、視聴者が直接スタジオに来て番組に参加する形がある。視聴者はゲストであったり、観客であったりする。参加できるのは、ごくわずかな視聴者である。

家庭にしながら番組に参加するためには、郵便や電話、さらには最近ではFAXなどが利用される。全ての視聴者に参加の機会は広げられたが、実際に参加できる確率は、物理的な制約からきわめて少人数である。

このところ、最新のテクノロジーを活用して従来では考えられなかった新しいタイプの視聴者参加番組の試みが始まっている。それは、視聴者参加手段の単なる多様化にとどまらず、マルチメディア技術を導入した「双方向テレビ」を目指す試みの一環である。

我々のプロジェクトも、こうした流れの中で発足した。より豊かな教育番組を目指して、双方向番組の試作に取り組んだ。その成果として、45分の双方向性の講座番組（試作番組）を録画の形で発表することができた。

本報告書は、試作番組の考え方や、その制作プロセスの記録である。我々の目指した方向について、教育放送に関心をお持ちの方々のご意見を聞かせて頂ければ幸いである。また、その技術的側面とくに端末の問題やプレゼンテーションの方法について、活発な議論と機器の開発を期待したいところである。

試作番組は、技術上のトリックと講師の演技で仕上げた「にせもの」である。近い将来、インフラや端末面での条件が整った段階で、あらためて「本物」の双方向番組を制作したいと願っている。

なお、試作番組は、NTTの高速ネットワーク実験の一環としての位置づけも持っており、関係者の皆さんに多大のご協力を頂いた。また、郵政省通信総合研究所や新世代通信網実験協議会(BBCC)、大阪産業大学など、多くの方々にも参加して頂いた。この場をお借りしてお礼を申し上げたい。

ところで、試作を終えた今、我々プロジェクトのメンバーは、複雑な感想を抱いている。対面教育（授業）の持つ双方向性を、遠隔教育（放送）の場にも持ち込もうとして、試作番組に取り組んだはずであった。しかし、そもそも大学の授業には、双方向性など、あまりなかったのではないか、という思いである。

平成9年5月

「双方向教育番組の試作・開発プロジェクト」主査

佐々木 正實